2008年1月15日発行（創刊 2002年3月31日）

仙台文学館ニュース

第十三号

Sendai Literature Museum News

仙台第一高等学校での井上ひさし

文学のある風景

一高軒のひろ子

一高軒へアルバイトに来ているひろ子が二女高の三年生だとわかったのは、教室の外の桜の老樹の青葉が、降り続く梅雨に濡れて黒く光っていた、六月中旬のある午後のことだった。

「二女高の演劇部の代表が来てんのっしゃ。一高の演劇部と合同公演の相談ばしてっとこだとっしゃ」

二女高生は五人いた。

壁の黒板に近いほうからいうと、まず、吊り上った眼に眼鏡をかけたよく喋る女の子、痩せていて色白なところが稔の好みに合うが、いかにも小生意気そうである。……

そして五番目がひろ子だった。一高軒で働いているときの大人びた雰囲気は、今は制服に包まれ隠されて、ひとかけらもない。ひろ子は牛乳を静かに飲んでいるところだったが、その仕草はごく自然で、照れも衒いもなかった。牛乳壜の口にそっと触れられている形のよいひろ子の下唇に見惚れながら、稔はああ、あの牛乳壜になれたらなぁと思った。

（井上ひさし『青葉繁れる』より）

『青葉繁れる』
（文藝春秋 1973年）

小池 光の 気になる日本語 ②

「こんにちは」

人は会えば挨拶を交わす。挨拶のことばなどいちいち意味を考えるまでもないが、改めて見直すとちょっと興味が湧く。

挨拶は、要するに好意の表明である。あなたに会って嬉しい、あなたを親密に思う、あなたに対して何ら敵意をもっていない、そういう心情を短いことばで伝える。

それぞれの国のことばでそれぞれの挨拶があるが、この好意の表明という点で中国語など実に率直とおもえる。

ニーハオ、你好、で終わり。你はあなたという意味、ハオはこれはさまざまなニュアンスがあるだろうが、要は好意の好であり、あなた元気！　とかあなたすてきネ！　とか言い合う。挨拶語の本質をもっともストレートに伝えていかにも実際的というか現実主義的な文化風土の反映がみられる。もってまわった言い方をしない。

日本語の挨拶はおよそその正反対で、ものすごくもってまわった言い方をする。代表的挨拶語「こんにちは」を改めて考えてみると好意もなにも感情らしきものはどこにも表面にあらわれない。好意は、ひたすら語の背後に隠されている。

言い換えると後ろに続く本文は省略されている。今日は、あなたにお目にかかれてうれしい、の省略形が「こんにちは」である。だから「こんにちは」と書き、「こんにちわ」と書いてはいけないのだが、最近の高校生などは語源への関心がすっかり希薄になって「先生、こんにちわ」などと書いた手紙をくれたりしたこともあった。

日本人の伝統的美意識は直接の好意の表明を慎み、間に季節や天候のことなどを挟み、それからおもむろに好意の言上に及ぶ。したがって右も正確に言えば、

「今日は、お日柄もよく、天象うるわしく、あまつさえあなたにお目にかかれる幸運に恵まれ、まことにうれしく存じます」

というながーいセンテンスの省略となろう。「ニーハオ」の単刀直入さに比べ、この最大限の迂回路ぶりが彼我の文化の差を伝えて味わいふかい。

夜間の挨拶「こんばんは」も同様だが、「こんばんは」があるなら朝の挨拶に「けさは」というのがあってもよさそうだが、それはない。「こんにちは」「こんばんは」共に五音、「けさは」は三音、この二音の差は絶大で、「けさは」では短すぎて言いにくいのである。短歌の五七五七七の五音と「こんにちは」「こんばんは」などの五音はおそらくどこか微妙なところで繋がっている。

挨拶語は地方地方で特色があって仙台では「お晩です」と言う。丁寧に言うときは「お晩かたです」と言い、「お晩でござりす」などとも昔の人は言った。軽く言うときは「お晩ない」と声掛けした記憶があるが、はて「ない」の語源と意味はなんなのだろう？

「こんばんは」より「お晩です」がふっくらして夜が深い感じがする。お月様がケヤキの梢からそっと顔を出している。

（仙台文学館館長）

学芸室日記

○昨秋に始動した仙台文学館ゼミナール。受講生の皆さんの熱心さに、職員も大いに刺激されています。さて去る12月、ゼミナールの講師のおひとりである仙台在住の作家・佐伯一麦さんが、ノルウェーでの体験をもとにした長篇小説『ノルゲ』で第60回「野間文芸賞」を受賞されました。この作品で「人間」の姿をかなり描くことができた、という佐伯さん。本当におめでとうございます。

○館内の話題をひとつ。「グッズ研」…それは職員の謎のクラブ活動、ではなくミュージアムグッズの開発研究担当班のこと。今時、グッズはその館の「売り」のひとつ。現在、当館で販売しているものは便箋、絵葉書等々「紙物」中心ですが、もっと魅力的なオリジナルグッズをお届けできるよう、悩み楽しみつつ企画開発を進めています。

グッズ研打ち合わせ風景。皆さんからのアイディアも募集中です！

○数々の名作で今なお愛される文豪・夏目漱石が、実は仙台に大きな「遺産」を残しているのをご存じですか？　もちろん金銀財宝ではありません。ではどんな遺産かは、この春の特別展をご覧になればご納得いただけるはず。ご来場をお待ちしております。

「漱石写真帖」から

特別展
「文豪・夏目漱石のこころ」
（会期　3月15日～5月18日）

仙台文学館ニュース　第十三号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.lit.city.sendai.jp/

【表紙写真】佐々木隆二
【本文挿画】古山　拓
【印刷】（株）ユーメディア

R100 SOY INK 古紙配合率100%再生紙を使用しています

シリーズ 私の一冊 第十二回

「ファーブル昆虫記」

北杜夫

私は少年時代、読書と言えばほとんど「少年クラブ」の子供読物であった。中でも確か小学校四年の頃に始まった江戸川乱歩の「怪人二十面相」には夢中になったのを覚えている。

また同じ四年生の夏、宿題として昆虫標本を命じられた。私の生れた東京青山の家のまわりにはまだ原っぱがあって、幼ない頃から赤トンボやダイショウバッタなどを捕えていて、虫は大好きであったから、私は張りきって虫を集めた。夏休みには箱根の山荘に行ったので、そこでかなりの蝶を捕え、初めて蝶を展翅して二箱ばかりの標本を作り、自分ではかなり得意な気持でいた。

ところがクラスの一人の生徒の標本のほうがずっと良かった。おそらく父か兄に手伝って貰ったのか、一つ一つの標本にみんなラベルがついていて、それぞれの名前が記されていた。

私にしろモンシロチョウとかシオカラトンボくらいの名は知っていたが、こんなに多くの昆虫に一々名前がついているとは知らなかった。私は昆虫の名をそれぞれ記した「昆虫図鑑」というものがあることを初めて知った。

当時もっとも知られたものは、平山修次郎氏の「原色千種昆虫図譜」というものであった。これは三円三十銭もしたので、初めはちょっと手を出しかねた。それからようやく決心して近くの本屋に行った。カバーの汚れたものなど買いたくなかった。横のほうに変ったカバーのものがあって、それにも同じ題名が記されているので、夢中でそれを買い求めた。家に戻って開けてみると、ほとんどが台湾や朝鮮産の昆虫ばかりだった。私は改めて表紙を見、それが「原色千種続昆虫図譜」となっているのに気がついた。慌てて続篇のほうを買ってしまったのだ。正篇を買う金は持っていなかった。

幸か不幸か、その年の冬、私は急性腎炎にかかり、一学期間学校を休まねばならなかった。この病気は何より安静が必要である。少し良くなって床の上に起上れるようになったとき、大人が気の毒がって「昆虫図譜」の正篇を買ってきてくれた。私は箱根で採った金ピカのアゲハチョウが「ミヤマカラスアゲハ」であることや、都会にいるのは「クロアゲハ」であることなどを初めて知った。

私は毎日写真版の昆虫を眺め、解説の文も暗記するほど読んだ。春になって起上れるようになって庭の廊下に行って外を眺めたとき、私はその効果を改めて知った。空中にぶらさげられたように一匹の虻がじっと静止していた。私はその名がすぐ分かった。「ビロウドツリアブ」であった。

このようにしてすっかり昆虫好きになった私は、病気が治ったのち、渋谷にいる友人を訪ねた帰り、青山まで電車通りを歩いて帰った。途中にかなり多くの古本屋があり、その中にファーブルの「昆虫記」があった。当時それは岩波文庫で二十分冊もあった。

しかし、「昆虫記」は子供にとってはかなりむずかしい。虫好きの私も、初め「ゴミムシ」の章を読んで退屈したのを覚えている。だが次に「玉押しコガネ、スカラベ・サクレ」に当り、これは大いに興味ぶかく読めた。

それから中学二年までかかって二十分冊みんなを読んだ。何よりさまざまな虫たちの生態を初めて知ることができた。またところどころに、ファーブルの昔からの思い出の章があり、これは更に興味ぶかく読むことができた。

たとえばファーブルがまだ小学校の先生だった頃、一青年が来て代数を習いたいと言った。そのとき、ファーブルはまだ代数なるものを知らなかった。しかしファーブルはそれを承知し、図書室から代数の本を借り、一晩でその初めの部分を覚えこんだ。そしてそれを翌日青年に教え、青年がそれを理解してくれたとき、非常な満足感を得たと記している。

このようにして、やがて私は本物の昆虫マニアとなり、中学の末に家が焼けるまで、百箱に近い昆虫標本を所有するようになったのである。

私はかなりの昆虫の名を覚え、また千様のさまざまなその生態を知った。

私はやがて小説家になったが、人間はただ一つの種であるのに、その千様の昆虫以上の変化をそれぞれの個人が有している。私の人間を見る目も、虫たちの生態を知ることにより、より多く得られたような気がする。

『昆虫記』第一分冊
アンリ・ファーブル著　山田吉彦訳
（岩波文庫）

「私の一冊」写真帖 ～北 杜夫編～

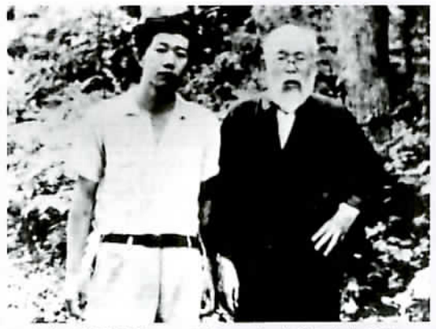
昭和13年3月、青南小学校4年生の頃。昆虫採集に熱中し、採集方法や虫に関するクイズなどを記した手書きの小冊子をつくったりしていた。

『どくとるマンボウ青春記』
昭和43年3月、中央公論社

松本高校時代と仙台での思い出を記したエッセイ。北さんが学生だった頃の仙台は、まだ戦災の名残をとどめた、砂埃のひどい街であった。唯一の娯楽はダンスとパチンコで、北さんもダンスホールに通い、ステップを学んだという。

『或る青春の日記』
昭和63年11月、中央公論社

東北大学医学部に在学した昭和23年4月から28年3月までの日記。青春時代の苦悩、文学への情熱が垣間見える。昭和28年2月25日に、父・茂吉が死去した際の記述も残る。



父・茂吉と箱根・強羅にて。昭和25年、大学3年生の頃。

写真協力／斎藤茂吉記念館、世田谷文学館

北　杜夫（作家）
1927（昭和2）年、東京生まれ。父は医師であり歌人の斎藤茂吉。旧制松本高校卒業後、1948年、東北大学医学部に入学し約5年間を仙台で過ごす。1960年、『夜と霧の隅で』により第43回芥川賞受賞。『どくとるマンボウ航海記』に始まる「マンボウシリーズ」や、軽妙なエッセイにも多くのファンをもつ。著作に『楡家の人びと』（第18回毎日出版文化賞）『輝ける碧き空の下で』（第18回日本文学大賞文芸部門）、父・茂吉の評伝四部作『青年茂吉』『壮年茂吉』『茂吉彷徨』『茂吉晩年』（第25回大佛次郎賞）ほか多数。